



南海研だより

No. 12

1984年8月

南方海域研究センター

旧電子計算機室へ移転



すでに御案内申上げましたように、南海研センターは、過ぐる5月2日、旧電子計算機センターの建物に移転いたしました。学長、理学部長を始めとする多くの方々の多大な御努力によって実現いたしました。ここに記して感謝の意を表する次第です。

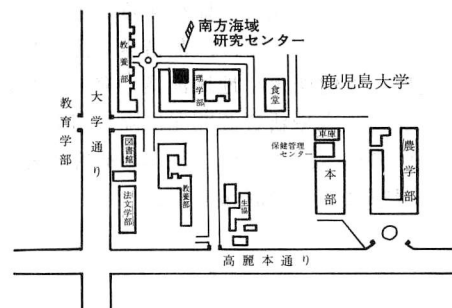
これまで本部事務棟の3階及び4階の各一部屋に教官と事務官6人がひしめき、センター長が使える机一つないという過密状態からはひとまず脱することができました。とはいえ、旧電子計算機室は数回の増築を経過して現在の形になったものであるため、使い勝手が悪い点も多く、また当然のことながら実験、実習用の設備、施設は皆無であり、今後いくらかの改修をお願いしなければならないと思われます。このように

不十分な面はあるものの、独立した建物でしかも実験ができる態勢ができ上りつつあることは、たとえば学内の共同研究の場としての利用も可能になり、センターとしては一歩前進したものでありましょう。

この移転披露の会が去る6月25日(月)17:00～、教官、事務官約100名の御出席を得て開かれました。岩切成郎センター長挨拶、石神兼文学長祝辞、福井悌次郎事務局長祝辞及び乾杯、で始まったこの会は、ささやかではありましたが多くの参会者で盛会であったことを御報告いたします。

なお上記のような南海研のプレート(毛筆は岩切センター長)ができ上りました。センターの位置は下記の通りです。お立寄り下さい。

(井上)



シンポジウム「熱帯域の有毒魚介類」

企画責任 井上晃男（南海研）

1983年9月26日

1) 熱帯域の有毒魚介類

安元 健（東北大学農学部）

熱帯域に散在する島嶼国の住民の食生活において、魚介類は良質かつ安価な蛋白源であるのみならず、歴史的な嗜好も加わって極めて重要な位置を占めており、その安全性を確保することは他の地域の場合以上に重要な課題である。しかるに、この海域ではシガテラ、クルペウトキシズム、アイゴ中毒、魚卵毒による中毒、まひ性貝中毒、カニによる食中毒、カメによる食中毒等の多様な食中毒が発生し、毒化する魚介類の種類、毒の種類が多く、さらに地域の変化、年次的な変化が加わって極めて複雑な様相を呈する。

一部の研究者の熱心な努力にも拘らず、これらの食中毒の解明が遅れていたのは、遠隔の地での試料の採集や運搬が困難なこと、統計資料等の不備のため中毒の実態が把握されず、研究者の関心を引き得なかったことがあげられていた。しかし、最大の理由は生物、生態、化学、医学の各専門家の組織的な協力がなかったことと考えられた。幸いに本研究班では地域と専門を異にする研究者が緊密に協力し、魚介類の毒化機構が多くの場合は食物連鎖による毒の移行、蓄積にあることを示し、同時に原因生物の同定も行うことができた。これらの毒化原因生物の増減は環境要因に大きく支配され、サンゴ礁海域での環境改変に際して留意すべき事項が明らかにされた。また毒の性状解明と検出定量法の設定によって、毒化状況を監視することが可能になりつつある。ここでは、熱帯域の魚介類の毒化の実態、保健衛生や地域漁業の発展に与える影響、環境改変や新資源開発に際しての留意事項について述べ、さらにこれ迄の研究の総括と将来の展望について討議する。

2) シガテラに関連する鞭毛藻と毒の性状

安元 健（東北大学農学部）

シガテラとはサンゴ礁に生息し、または接近して摂餌する魚が毒化するために起きる食中毒の名称である。わが国では奄美大島、沖縄、小笠原諸島産の魚および南方海域から持ち込まれた魚で発生し、太平洋域で毎年数千人以上の患者発生が推定されている。魚の毒化機構としては食物連鎖説が唱えられていたが、毒の第一次生産者は不明であった。われわれは仏領ポリネシアで食性の異なる各種の魚の消化管内容物と各種底性生物を調べ、海藻表面に着生する新種の渦鞭毛藻 *Gambierdiscus toxicus* を毒の第一次生産者と推定した。一方、1トンの有毒魚から主要毒のシガトキシンを抽出し、精製を試みたが、含量が低いために十分な精製に至らず、各種スペクトル測定や結晶化は不可能であった。各種化学反応と毒性の消失との関連を調べた結果、ケトン、エステル、各種アミノ基は存在せず、水酸基と二重結合の存在が推定された。カルボキシル基の存否は確認できなかった。シガトキシンのヒトにおける経口的最小発症量は約10MUと推定され、この値を基準にして毒性試験法を設定した。ナンヨウブダイ筋肉の毒の主成分であるスカリトキシンは多くの点でシガトキシんに類似していた。一方、草食性魚の内臓に検出されるマイトトキシンは高分子量の多価水酸化化合物で、海産毒としては最も毒性が強く、興奮膜のCa⁺⁺チャンネルを特異的に活性化作用を有すると考えられ注目された。*G. toxicus*と同様な底性生活種が多数見出され、シガテラ魚に時折り検出される副成分の起源ではないかと想定された。その中の1種 *Prorocentrum lima* の生産する脂溶性毒がシガトキシンやスカリトキシンの性状に類似したので単離、解析した結果、脂肪酸のポリエーテル誘導体 *okadaic acid* とそのエステル群であることが判明した。

3) 熱帯域の有毒鞭毛藻の分類

福代 康夫 (東京大学農学部)

熱帯域に分布する鞭毛藻の中で、有毒種と考えられている種の大部分は渦鞭毛藻に属しており、主要なものとして次の11種があげられる。

プロロセントラム目(Prorocentrales)

Prorocentrum concavum FUKUYO

Prorocentrum lima (EHRENBERG)

DODGE

ギムノディニウム目(Gymnodiniales)

Amphidinium carteri HULBURT

Amphidinium klebsii KOFOID et SWEZY
emend. TAYLOR

Amphidinium rhynchocephalum

ANISSIMOWA

Ptychodiscus brevis (DAVIS)

STEIDINGER(=*Gymnodinium
breve*)

ゴニオラックス目(Gonyaulacales)

Gambierdiscus toxicus ADACHI et
FUKUYO

Gessnerium monilatum (HOWELL)

LOEBLICH, III(=*Gonyaulax
monilata*)

Heteraulacus sp.(=*Goniodoma* sp.)

Ostreopsis siamensis SCHMIDT

Pyrodinium bahamense var. *compressum*

この11種のなかでは、*Pty. brevis*, *Gess. monilatum*, *Heteraulacus* sp., *Pyro. bahamense* v. *compressum* の4種は浮游性種で赤潮を形成することが知られている。一方、*Proro. concavum*, *Proro. lima*, *A. carteri*, *A. klebsii*, *Gam. toxicus*, *O. siamensis* の6種は浮游性が弱く、石灰藻やラッパモクなど珊瑚礁に生えている海藻の藻体上に付着して、プランクトベントス(Planktobenthos)ともよべる生態をしている。特に *Gam. toxicus* は石灰藻体上で200,000 cells/cm² の高密度に付着し、あたかも屋根瓦を並べたように見え、さらにこの細胞マットの上を *Gam. toxicus* の分泌したと思われる薄膜状粘質物が覆っていることもある。*A. carteri* と *A. klebsii* は培養時には自由遊泳だけでなく、自らの周囲に粘質物を分泌して游泳を停止した後、粘質物内で分裂することがある。この分泌物は

外圍の変化に抵抗性があり、数ヶ月以上休止状態を継続することができる。なお *A. carteri* には有性生殖が知られている。

4) シガテラ毒化原因鞭毛藻の分布と生育環境

井上 晃男 (鹿児島大学南海研)

シガテラの原因生物であることが確認された渦鞭毛藻 *G. toxicus* の分布状況を調べるため、南方辺地でも容易に適用できる簡易調査方法を確立した。この方法を用いて仏領ポリネシアの島々を始めとして、多くの場所で本種の分布や生態を調査した。また併せて生息海域の環境についても検討した。

本種は大型海藻に好んで付着生育し、砂礫やサンゴ上で生育することは比較的少なく、また海水中に浮游して生育することは極めて稀である。付着基質になる海藻には選択性があり、たとえば *Turbinaria ornata* (褐藻) や *Jania* sp. (紅藻) などは絶好の基質になる。さらに、藻体の老若、大小にも関係がある。これまでの調査で得られた最大の付着数は、海藻1g当り約500,000個であった。仏領ポリネシアのほぼ中央に位置するタヒチとその周辺の島、東端のガンビエ諸島及びニューカレドニアなどにおける調査結果を総合すると次のようになる。1) ほとんどすべての調査地域で分布が認められる。2) その分布には著しい地域性がある。3) 水変りのよい、直接波が当たらない、約5m以浅の海域に好んで生育する。4) その数は比較的短い期間内にも顕著に増減する。5) 分布と魚の毒化とは密接な関連がある。6) 生息域における一般的な海洋環境調査では、特に顕著な特徴は認められない。7) 現在シガテラが認められない地域でも、その発生の可能性が潜在していると推定される場合が多い。

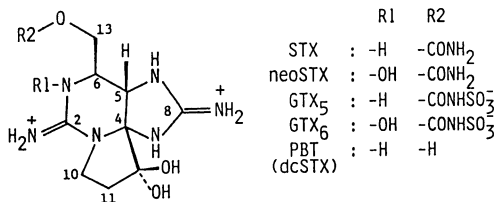
このように生息数の増減、局地性は認められるものの、調査の結果たとえ1個でも *G. toxicus* が見出された場合、その海域ではたえずシガテラ発生の可能性を秘めていることになる。また流れ藻(ホンダワラ)に付着して本種が生育していた事実を併せて考えると、南太平洋海域ではどこでも、いつでもシガテラが発生し得ると考えても決して誤りではないようである。

5) 熱帯域のまひ性貝毒原因鞭毛藻と毒の性状

大島 泰克 (東北大学農学部)

北米, 欧州, 日本などにおいて二枚貝が有毒渦鞭毛藻 *Protogonyaulax catenella* や *P.tamarensis* を摂餌することによって毒化し, まひ性貝中毒 (Paralytic Shellfish Poisoning, PSP) と呼ばれる食中毒をひき起こすことがあり, これら原因渦鞭毛藻の生態や毒の化学的研究が古くから行なわれてきた。一方, PSP 類似の食中毒がニューギニア, ボルネオなどの熱帯域でも報じられ, *Pyrodinium bahamense* var. *compressa* が毒化原因として疑われていたが, 毒の生産能や関与する毒の性状は十分に解明されていなかった。そこで我々はパラオ諸島のコロール島の一湾で高密度で生息している同渦鞭毛藻と二枚貝を採集し, 試料が高毒力を示すことおよび藻体が岩手県産の *P.tamarensis* に匹敵する毒力を示すことを明らかにした。*P.bahamense* var. *compressa* の毒の生産は培養によっても確認され, 同渦鞭毛藻および毒化二枚貝の有毒成分の分析では saxitoxin (STX), neosaxitoxin (neo STX) gonyautoxin V, VI (GTX 5,6) および PBT と仮称した新成分が検出され, まひ性貝毒であることが確認されたが, その組成は日本産の *Protogonyaulax* 属と大きく異なっていた。構造未定の GTX 5, 6, PBT は解析の結果, 図に示す構造を有することが明らかとなった。

上記地域以外にフィジー, ソロモン, インドなどでも PSP が発生しており, 同渦鞭毛藻がハワイでも確認されるなど, 広い分布域を有することが予想される。従って, 多くの熱帯域が潜在的な PSP の危険にさらされていると考えられる。



6) 熱帯域のカニおよび巻貝類の毒化原因と毒の性状

小瀧 裕一 (尚絅女学院短期大学)

橋本らは南西諸島その他の海域産のウモレオウギガニ, スベスベマンジュウガニ, ヒラアシオウギガニの3種に強いまひ毒を検出し, 最初の種から saxitoxin (STX) を単離した。筆者らはサンゴ礁に生息する巻貝のヤコウガイ, チョウセンサザエ, ギンタカハマ, サラサバタイに gonyautoxin I - III (GTX1-3), STX, neosaxitoxin (neo STX) と構造未知の TST と名付けた新成分の存在を明らかにし, さらに上記カニの毒組成を再検討し, STX, neo STX, decarbamoyl saxitoxin (de STX) を同定した。これらのカニや巻貝の毒性は顕著な地域差, 個体差を示し, 毒の起源がその餌となる底性生物であることを示唆した。そこで, 底性鞭毛藻, らん藻, 一般海藻について検討を行った結果, 紅藻石灰藻のモサズキ属の1種, *Jania* sp. に GTX 1-3 を検出した。本海藻の毒力は春期に 1.5MU/g を示し, 毒化するカニや巻貝の胃中に存在することから, 毒の起源生物であると同定した。本海藻はサンゴ礁上では局地的な分布を示すので, カニや巻貝の毒性の局地性と関連があるのではないかと考え, 本海藻の密度の高い石垣島川平地先リーフのカニ4科12種を調べたところ, 既知3種に加え新たに7種のカニに毒を検出し, オウギガニ科のカニ以外でも毒化することを明らかにした。一方, 毒を生産している海藻とカニや巻貝の毒の組成を比較すると, 還元的な変換が行われていることが想定された。そこで, GTXs の標品をカニや巻貝の組織に加え, 細菌の増殖可能および不能な状態での毒の変換を観察した結果, 菌の増殖系で変換が進行することを見出した。このことを確認するために *Jania* sp. 表面およびカニと巻貝の胃から分離した細菌について, 毒の変換能を検討した結果, *Vibrio* spp. に変換能が認められた。したがって, カニや巻貝の胃中では細菌による還元的な交換が起きると推定された。

7) Ciguatera Outbreaks Induced by Disturbances on Coral Reef Ecosystems

Raymond BAGNIS*

One of the outstanding characteristics of ciguatera is its ecology, for the same group of species of fish varies in toxicity in both space and time. Poisonous fishes are directly linked to change in some factors of their environment. Any kind of disturbances in the coral reef system, natural or human made ones, can result in an outbreak of ciguatera fish poisoning.

The natural disturbance explain the ancientship of ciguatera and its occurence in many non inhabited islands and shoals far away from land. The best known and most frequent culprits are hurricanes, tsunami and storms, as observed or established in Marquesas archipelago, Caribbean and Mascareignes Islands.

The human made disturbances on reefs have various origins and primarily : blasting of the reef, crashing of ship anchors, shipwreck, dumping of material dredging, building of piers or wharfs and any other damage less evident and more traditional on alive coral, like diving for nacles and pearls, beaching on reef.

Whatever the disturbances in lagoon, pass, fringing or barrier reef, the result is the same : appearance of dead coral beds and new surfaces available for new populations. The reef community is probably the most complex in the sea and a delicate balance must exist among organisms in competition. Such that a very subtle change in the environment can result in the proliferation of one at expense of the others.

In the case of ciguatera, we know that *G.toxicus* population on reef is very poor in normal environmental condition. But it may increase suddenly among the filamentous or calcareous algae growing on new or denuded surfaces. The evolutive pattern of ciguatera depends on the importance of the disturbances both in time and space. Generally, the human made damages, provoke a located flare up. The first fish to be poisonous are the herbivores and detritus feeders, followed within a few months by the carnivores. The various links of the food web are involved. The toxic areas increase in space with the migratory habits of the fish.

* Head, Medical Oceanography Unit, Louis Malardé Institute of Medical Research.
P.O.Box 30, Papeete, Tahiti.

8) Ciguatera, Clupeotoxism and Other Seafood Poisoning in Fijian Waters and Their Impact to the Utilization of Marine Resources

Uday RAJ*

The following forms of seafood poisoning have been confirmed : Ciguatera, Clupeotoxism, Tetrodotoxism, Scombrotoxism, Ichthyo-ootoxism (from deep water), mullet poisoning, crab poisoning, paralytic shellfish poisoning and canned fish poisoning.

Ciguatera represents 96.4 per cent of all documented cases of marine food poisoning. From a total of 925 cases reported in the period between 1975 to 1983, the annual incidence rate is seen to vary from 3-57 cases per 100,000 of population. Fish species belonging to the families LUTJANIDAE, SRHYRAENIDAE, SERRANIDAE and LETHRINIDAE constitute the major ciguatoxic species. Although the Ciguatoxic species of fish are banned for sale, sales figures from municipal markets shows that species implicated in Ciguatera constituted approximately 42.5 per cent of all bottom dwelling lagoon and reef fishes sold in 1982. In the absence of a quick and reliable test for toxicity, ciguatera continues to pose a public health and a fishery problem.

Clupeotoxism has caused the highest mortality of all forms of marine food poisoning. Toxicity has been confirmed in three species of fishes : *Atherinomorous lacunosa* (family : ATHERINIDAE), *Herklotsichthys quardrimaculatus* and *Sardinella sirm* (family : CLUPEIDAE). Initial investigations have revealed that the fat soluble fraction of mainly viscera has at least three toxins. Also, a quick acting toxin has been found in the water-soluble fraction. The outset on clupeotoxism is very acute and death has been recorded with 1/2 hour to 11 hours after ingestion of the fish. The causative organisms appear to be in the plankton on which these species feed.

A new form of poisoning arising out of the gonad and liver of *Etelis coruscans* and *Epinephelus septomfasciatus* from deep water have been recorded. Two separate toxins from the roe of *E. coruscans* have been confirmed. Both, human symptoms and chromatographic properties of the toxins indicate that the poisoning differs from any of the previously known ichthyo-ootoxisms such as ciguatera, dinogunellin poisoning and hypervitaminosis A.

Eleven cases of scombrotoxism have been included in health Ministry case records since 1975. The fish species involved appear to be *Rastrelliger kanagurta*, *Rastrelliger branchysoma* (family: SCOMBRIDAE), and *Makaira* sp. (family : ISTHIOPHERIDAE).

Five cases of shellfish poisoning have been treated at government hospital since 1975, including a single case of fatality from the consumption of *Anadara antiquata* in 1980.

Marine food poisoning must be regarded as a potentially important public health and fishery problem. Testing facilities for continuous surveillance and research to identify causative organisms, characterization of toxins and easy, quick and reliable methods of identifying toxic species must be emphasized.

*Director, Institute of Marine Resources, The University of the South Pacific, Suva, Fiji.

〔第22回研究会発表要旨〕

南太平洋諸国のカツオ漁業

片岡千賀之 (水産)

南太平洋諸国における資本制漁業の展開は、2つの側面から検討されねばならない。1つは、それが先進国の資本と技術によって行われ、生産物は先進国に輸出される国際商品であるという点である。第2の側面は、南太平洋諸国が1970年代の独立を契機に自国の経済発展・自立化のため、現地化政策を推進して資本制漁業の動向に大きな影響力を及ぼすようになったことである。こうした2側面は、換言すれば漁業における南北問題といえよう。

南太平洋諸国で資本制漁業といえば、カツオ漁業、マグロ漁業、エビ漁業、真珠養殖業があるが、カツオ漁業が最も大規模で、行われている地域も広い。今回は、PNGのカツオ漁業を事例にとりあげる。

PNGでカツオ漁業が始まるきっかけを作ったのは1968年に締結された日豪漁業協定で1972年には日本および米国から4社のカツオ企業が進出した。1970年前後というのは、世界のカツオ・マグロ漁業が転機を迎えた時期で、マグロ漁業は資源の減少と中毒事件で衰退し、かわってカツオが豊富な資源と安全性とで評価されるようになってきた。PNGに進出してきたのは採算性の悪化したマグロや捕鯨から転入した漁

業資本とカツオ原料確保にのりだした商社とパッカーである。いずれも沖縄県漁船をチャーターしてビスマルク海で操業を開始している。また、創業に際しては、PNG政府との間で現地化の推進——資本・船籍の現地化、現地人の雇用拡大、缶詰加工——が取り極められた。

PNGのカツオ漁業は、早くも1970年代の後半から蹉跌をきたすようになる。すなわち、餌料漁場の制約、2波にわたる石油危機、マグロ水銀規制の緩和、円高・ドル安の進行、米国の不況の深化とカツオ需要の減少、そして10年契約更新を目前にしての重加算税問題の発生、現地化遂行の強化、1980年頃からPNG沖に進出してくるまき網漁業との市場競合の激化がそれで、4社は1982年までにいずれも撤退に追いこまれた。この間、現地化政策は資本および船籍、缶詰生産でみるべき成果をあげられず、現地人の雇用拡大も単純労働部門に限定されて問題を残した。

カツオ漁業の停止によってPNG経済は大打撃を受けたが、同じく大量休業に陥った沖縄県側との間で漁業協定が締結され、1984年から再開されるようになった。新形式による漁業再開は、その動向が注目されるところである。

南海研センター 兼務教官異動

新任	原 口 泉 (法文学部 助教授)	1984年 4月21日
	波多野 浩 道 (歯学部 助手)	〃 4月25日
	仲 田 浩 三 (教養部 助教授)	〃 5月16日
辞任	衛 藤 威 臣 (農学部 助手)	〃 5月21日

シンポジウム「熱帯と肝臓病」

企画責任 寺師慎一（南海研）

1984年2月6日

1) ソテツ種子含有配糖体 (Cycasin)による実験的肝癌

小林 昭(鹿大農学部農芸化学)

寺師 慎一(鹿児島大南海研)

ソテツは南九州を北限とし、亜熱帯地域および熱帯アジアにかけて広く自生分布している。日本ではソテツを庭園樹や防風林の目的で植樹し、また一部で種子胚は食品としても利用している。一方、グアム島の住民に神経疾患(筋萎縮性側索硬化症)の発生頻度が高くその原因にソテツを食品とすることが考えられること、さらにソテツの自生している牧場で飼育された牛に後肢の麻痺がみられることも知られていた。

1963年に Laqueur らはこの様な神経疾患の原因の解明を目的として、グアム島産ソテツ種子胚粉末を飼料に混じり白鼠を用いて連日投与実験を行ったところ、意外や肝臓、腎臓の腫瘍が多数例に発生した。その後、このソテツ種子胚に含まれる癌原性物質は西田ら(鹿大農学部)によって1955年にすでに日本産ソテツ種子胚より Cycasin の名称で抽出、単離までなされたものであることも判明した。

この癌原性物質 Cycasin は投与量とその回数を変えると、腫瘍発生臓器が異ってくる。今回、小林らによって奄美大島産 *Cycas revoluta* Thunb. の種子胚より抽出、純結晶化された Cycasin を用いて終生連日投与実験を行い、高頻度に肝癌の発生をみた。

実験動物には Sprague-Dawley 系白鼠生後21日(幼若群)と同50日(成熟群)を用いた。Cycasin は100mg/l の割合で水道水に溶解し給水瓶による自由摂取をさせたが、その飲料水残量より白鼠のおのの Cycasin 摂取量は10mg/kg/日と算定された。実験開始後167日より肝腫瘍の発生がみられた。肝腫瘍は幼若群雌性17例中15例(82.4%)、雄性16例中14例(87.5%)と雌雄差はなく、その腫瘍発生日数はそれぞれ平均 335.9

日、310.1日と雄性がやや早い傾向を示した。成熟群では雌性、雄性いずれも20例18例(90.0%)にみられ、腫瘍発生平均日数はそれぞれ410.2日、412.3日とその差は認めなかった。

肉眼的に肝腫瘍は灰白色ないし褐色調を呈し比較的軟く、肝臓にびまん性にみられるものや、塊状を呈すものがあり、他に出血の合併例があった。また雌雄、各群でおのおの数例に肺転移巣がみられた。

病理組織学的には正常肝細胞索構造類似の分化型肝細胞癌、さらに一部の腸上皮化生を有す腺癌型、その他部分的には肉腫様の像を示す低分化型肝細胞癌がみられた。そのうち数例については電顕的検索を行った。

熱帯地域の人肝癌の一因に Cycasin の可能性の記載もあるが、今後その様な地の現状調査が必要と思われる。

2) ウイルス性肝炎の疫学、 臨床、病理

志方 俊夫(日大医学部病理
長崎大熱研防疫部門)

勿論ウイルス性肝炎は Worldwide の伝染性疾患であり南方海域に特徴的な疾患ではない。然し長い間みつからなかったその起因ウイルスが、オーストラリアや原住民の血清中のリポ蛋白、オーストラリア抗原の発見を契機にしてみつかったという事実、又他の多くの伝染性疾患がそうであるように、温帯地方の先進国では急速にコントロールされて減少し、将来南方の熱帯地方に限定される可能性の高い事実からいって、熱帯の肝疾患としての重要性はいう迄もないことである。

すでに A 型肝炎はその起因ウイルスが発見される以前から、温帯の先進国では衛生環境の改善により、どんどん減少してしまっている。ところが現在でも東南アジアなど熱帯地域では A 型肝炎は常在しており、5 才位迄の間にほとん

どの人、即ち90%以上の人々が感染して抗体を持つに至るのである。

B型肝炎の蔓延度も地理病理学的にいちじるしい差がある。B型肝炎ウイルスはA型肝炎ウイルスと異なり、一過性の感染で急性肝炎をおこすだけでなく、持続感染により慢性肝炎、肝硬変、肝細胞癌を引きおこす。又何ら臨床症状を示さない健康保菌者が多数いる。B型肝炎の蔓延度は一般住民中の保菌者のパーセントで示すが、東南アジア、オセアニア、サハラ砂漠以南のアフリカでは極めて高く、5~20%に及ぶ。即ち蔓延度の高い地域或いは部落では5人に1人は肝炎ウイルスの保持者ということになる。これに対して日本では2~3%、欧米では0.2~0.5%である。

人の癌のうちでウイルス発癌が明らかなものは必ずしも多くはないが、B型肝炎ウイルスと肝細胞癌の関係は疑うべくもない。すでに肝細胞癌のDNAの中にB型肝炎ウイルスの遺伝子が組込まれていることも明らかになっているが、発癌のメカニズムは未だ解明されていない。

日米欧で現在一番問題になっている非A非B型肝炎がアジア、オセアニア地域でどの様な頻度で存在するのか未だ明らかでない。然し少くともインド、ビルマなどでは温帯地方にはみられない型の非A非B型肝炎があることははっきりしている。

3) 熱帯地における主な出血熱、原虫感染症、中毒性疾患の肝臓病変

板倉 英世 (長崎大熱研病理部門)

熱帯地域にはさまざまな感染症や中毒性疾患があるが、それらの多くは肝臓にも特徴ある病変を起こすことが多い。下記に示すような主な熱帯性疾患における肝臓の病変について病理組織学的所見を記述する。出血熱のうち国際伝染病とされているラッサ熱、マールブルグ病、エボラ出血熱では何れも病理学的には全身の出血性病変および壊死を主とする病変が主体であるが、肝臓における病変がとくに強い。すなわち肝実質細胞の変性および壊死とそれともなう肝臓内の出血が特徴的である。また肝臓の壊死

性変化に比べ炎症性の細胞浸潤が比較的軽度である。韓国流行性出血熱では肝実質細胞の変性、壊死とともに肝小葉辺縁部における細胆管様組織の増生が比較的明瞭であり、それらの内腔に胆汁を貯溜していることがある。デング出血熱では肝臓内にも出血を来すことがあるが、炎症性細胞浸潤は比較的軽度である。昔から熱帯地のウイルス性出血熱の代表的な疾患として黄熱病がよく知られている。黄熱病では肝病変が全身の病変の中でも主体をなすものである。病理組織学的には、肝小葉中間帯の肝実質の帯状の壊死性変化を示すことが特徴的である。また単一の肝細胞の凝固壊死はCouncilman bodyとしてよく知られている。

原虫感染症である熱帯熱マラリアでは、肝臓内のKupffer細胞にマラリア原虫が取り込まれていることが多いが、重篤な症例では肝実質細胞の変性や単一壊死が見られることがあり得る。三日熱マラリアでは、肝臓内のKupffer細胞がマラリア色素を取り込んでいるが、再感染を繰り返す割合には肝臓の慢性病変は軽度である。リーシュマニア症のうちの内臓型(カラ・アザール)では、門脈域を主とした円形細胞の浸潤が見られるのでウイルス性慢性肝炎と見誤られることがあるが、本症では形質細胞の浸潤が主体である。また虫体をKupffer細胞や肝実質細胞内に見出すことが出来る。

熱帯地方において常に問題となる中毒症の一つにアフラトキシン中毒症がある。これは主として食品中に寄生する真菌類の一種の毒性代謝産物(カビ毒)によって引き起こされるのであるが、本症においても肝臓病変が主体である。この場合は肝小葉の中心性の壊死を来すのが特徴である。

以上、各病因によって肝臓病変の肝臓構築の最小単位である肝小葉内に現われる部位はそれぞれ異なるのである。このほか熱帯地においてやはり感染率の高いウイルス性肝炎の病態像ともかなり差異があるものと思われる。

〔第25回研究会発表要旨〕

日本語とインドネシア語の対照研究

田尻 英三 (教育)

対照研究とは、比較研究のように言語間の親縁関係や系統を問題とはせず、当該言語の共時態を対照し、その体系上の差異や類似などを研究するものであり、一般言語理論の応用の一分野でもあり、外国語教育に役立てるという具体的な目的ももっている。

私自身は、1981年8月から一年間インドネシアのバンドン市にあるパジャジャラン大学へ日本語学の専門家として国際交流基金から派遣され、実際にバンドンのいくつかの大学で教えてみて、この方面の研究の必要性を痛感した。

インドネシア語はマレー語を基礎として現在も作られつつある言語で、語彙的にも各地の部族語（例えば、ジャワ語・スンダ語・ミナンカバウ語など）やジャカルタ方言（“Kamus Dialek Jakarta”というジャカルタ方言辞典まで出版されている）が入っている。今回の発表ではこれらの部族語の問題についてはふれず、日本語とインドネシア語の音声・音韻の差異や文法構造の問題点について説明した。

音声・音韻については、インドネシア語英語辞典として高い評価をうけている Echols と Shadily のものなどには、インドネシア語には9母音あると説明しているが、二重母音として発音する場合にあらわれる異音を除けば、音韻的には6母音とみなすべきであると考え。音価の面では日本人がインドネシア語の〔u〕という母音を発音するためには唇をかなり丸めなければならない点を注意する必要がある。

また、インドネシア語においては語末の撥音は、peram（鳩がなく）・peran（役者）・perang（戦争）のように、m・n・ngの使い分けがあ

り、この点では日本語とは違っているが、語中の撥音、例えば membagi（分ける）・mendaki（登る）・menggali（堀る）のm・n・ngの使い分けは、日本語の山脈・山頂・山岳の「ん」の音が次に来る子音の発音位置次第で決まるという現象と全く同じである。

この他、インドネシア語にあって日本語にない音素や音節についても説明を加えた。

文法的な面では、語順が日本語とインドネシア語では一種の鏡像関係を示すことを指摘した（但し、数量・時間を表わす語がつく場合は語順は同じ）。またインドネシア語の能動態と受動態の関係や、崎山理氏や佐々木重次氏が言説しておられる二重主語文についても言及したが、私見では日本語の「は」と「が」の関係がインドネシア語にもみられるという点は日本語の格関係からみて納得し難いことを述べた。

語彙的な面では、インドネシア語が多くの複雑な接頭語・接尾語をもっている点を“ajar”という語を例として説明した。この点は日本人がインドネシア語を習得する際に一番やっかいな点であろう。

なお、拙稿「インドネシアの日本語教育」（鹿児島大学教育学部研究紀要第35巻、昭和59年3月発行）も併せて参照していただきたい。

〔学 会 報 告〕

イギリス生態学会研究会に出席して

中野 和敬(南海研)

イギリス生態学会は今世紀の初期に創設された世界中の生態学会の中でもしにせ中のしにせで、*Journal of Ecology*は今年で72巻を数える。現在でもイギリスの生態学界は、論文の数こそアメリカ程ではないものの、質的には非常に高い評価を受けている。そのイギリスの生態学会に小生も会員として末席を汚しているが、4月13日(何と金曜日)にロンドンで学会内の研究グループの一つである Tropical Ecology Group が焼き畑の生態学という題で研究会を催すという知らせを見て急遽出席する気になり、休暇を取ってロンドン行きの飛行機の客となった。というのは、小生が今一番かかわりを持っている研究テーマが焼き畑の生態学だからである。

当日の研究会は午前10時よりロンドン大学の東洋及びアフリカ学教室で開かれた。プログラムは以下の五つの発表を中心として夕方5時頃まで討論の時間も十分取って進められた。

最初の発表者は J.P.J.Pottier (ロンドン大学) という文化人類学者だったが、現在急速に地歩を固めつつある生態人類学の見地からのザンビアのベンバ族の現地調査に基づく研究だった。ミオンボという疎林地帯に住むこの部族は以前から、予定した畑地面積よりずっと広い範囲の林を切り拓いた後、周縁部で切り倒された木を中心部へ運び、その中心部のみに火をつけて燃やすという方式を取ることで有名だったが、1950年代頃まではその焼き畑体系が安定なシステムとして環境によく適応していたのに、周辺の地域の銅鉱山の開発を契機とした“近代化”と、それに関連した人口増の結果、システムが不安定となり、住民側に急激な対応を迫ることとなった経過を報告した。

次の発表者は A.C.Millington (レディング大学) という人で、彼はこの分野の古典である Nye & Greenland の *The soil under shifting Cultivation*

(1960) の再検討と自分が西アフリカのシェラ・レオネで行なった焼き畑と土壌侵食との関係を見た実験的な調査結果を主とした報告を行なった。

3番目の発表者は前の Millington 同様地理学の出身で、ニューギニアを始め南太平洋地域の中広い研究で有名な T.Bayliss-Smith (ケンブリッジ大学) だったが、この日はニューギニア高地の農業の概説を行なった。

4番目の発表者の M.J.Eden (ロンドンのベッドフォード校) も地理学教室に所属している人であるが、この人とは以前にもマレーシアのクアラルンプールで開かれた国際熱帯生態学会で顔を合わせたことがあって、話しのしやすい人である。この日の Eden の話しは、彼が南米コロンビアで行なった調査の結果についてだったが、主題は焼き畑の生態学としてはオーソドックスな焼き畑方式のデスクリプションと植生及び土壌が焼き畑によってこうむる攪乱についてだった。

最後の発表者の B.R.Trenbath (エルム・ファーム研究センター) はこれまで発表されている主として東南アジアのデータを集めて焼き畑様式と植生、土壌肥沃度との関係を組みあわせたセンシティブィティ・モデルを展開した。

発表後の討論では Pottier を除く発表者と小生を加えた5人で主にくり広げられたが、小生がこれまでの研究はあまりにも焼き畑の土壌肥沃度の変化に重点を置きすぎていたと指摘したところ、この分野の専門家はみな様にうなずいていた。なお、出席者は学生も含めて20名程だった。

イギリス生態学会で感心したことは、さすがに生態学というものをよく理解していて、この学問の学際性を十分に認識している点である。特に地理学出身者が生物学に基礎を置く生態学を本腰を入れて勉強し、生態学会に参加している点、しっかりした生態学の伝統を改ためて感じた。

〔現地調査報告〕

フィジーにおける *Nautilus pompilius* (オウムガイ) の生態調査
—1983年度文部省科学研究費海外学術調査—

早坂 祥三 (理)

古生代・中生代という長い地質時代を通じて大繁栄した四鰓頭足類(アンモナイト類およびオウムガイ類)の生き残りとして、現在西南太平洋にのみ生息している1属6種のオウムガイ類のうちで、最も広い分布域をもつ種が *Nautilus pompilius* (和名オウムガイ) である。この仲間は、従来、化石頭足類の生理・生態を類推するための情報源として重視されてきたが、自生地における生態や生息環境については不明な点が多かった。

この種について筆者等は、1980年、1981年、分布域の北西端に位置するフィリピンにおいて現地調査を実施した(文部省科学研究費; Hayasaka *et al.*, 1982および Hayasaka *ed.*, 1983参照)。又、1982年初頭には、本学南方海域研究センターが実施した第1回オセアニア総合調査に参加して、フィジー国のオウムガイ生息域について予備的調査を行なう機会を得た(Hayasaka *et al.*, 1984)。フィジーはフィリピンとは対照的に、*Nautilus pompilius* 分布域の南東端に位置し、両地域は、たがいに数千キロほど隔たっている。同一種の生態を、分布域の両端で比較することは極めて興味深く、1983年度には、再び科学研究費によってフィジーでの本調査を実施した*(課題番号 58041055)。

この調査に際しては、1982年にお世話になった U. Raj 博士(南太平洋大学教授、海洋資源

研究所長)との緊密な連絡によって万端の準備をととのえることができ、又、現地調査では、終始、文字通りの共同研究(調査活動の上でも、又、財政的にも)を実現することができたことは、参加者一同にとって最高の幸せであった。

1983年8月26日、ナウル航空で鹿児島をたち、ナウル乗換で28日スヴァ着。翌29日から9月27日までの30日間、南太平洋大学、海洋資源研究所をベースとして、ヴィティ・レヴ島南東海域での調査に従事した。研究所所属の“Nautilus”、“Aphareus”という二隻の船を連日フルに使わせて頂き、Raj 所長以下大半の職員の協力を得て、予定の調査をほぼ完全に実施することができた。

調査内容は、オウムガイが生息する海域の海底地形、堆積物、水温、水質などの環境条件に関すること、その海域でのオウムガイの分布状態、深海底における自然生態(水中カメラ、テレビを使用)、採集直後の室内水槽における行動の観察、などに重点がおかれた。又、将来にわたる現地研究者との共同研究計画の一つとして、採集された標本の計測、計量記載の後、できるだけ多くの標本に標識番号をつけて放流することにつとめた。

南半球に位置するフィジー諸島では冬から春にむかう季節で、街では流感が大流行。私たちのグループも、50歳台の2名を除いて順次流感になやませられたが、スヴァ市内のアパートメント・ホテルでの自炊生活は、毎日珍事の連続で、一同にとっては楽しい思い出となった。

帰途は、ナウル航空鹿児島線週2便の内1便が突然廃止されたため、当初の予定を変更し、9月28日スヴァ発、ナウルで2泊の後、30日鹿児島に帰着した。各人3個体ずつの生きたオウムガイをクーラーに冷蔵して持ち帰ったが、長

*) 参加者は次の通り。

税所俊郎	鹿児島大学水産学部
柿沼好子	同上 理学部
塚原潤三	同上
大木公彦	同上
棚部一成	愛媛大学理学部
服部陸男	海洋科学技術センター

南海研センターの出版物

(1984年1月~6月)

時間の旅には耐えられず、すべて途中で死亡してしまい残念であった。

フィリピン、フィジー共に、現地の海洋生物学者をカウンターパートとしての調査であったが、両者の間では、オウムガイへの関心の持ち方、共同研究への取組み方などに微妙な違いがあり、プロジェクトを進めるにあたっては、それぞれに対応した細心の配慮が必要であった。このことは、海外での調査経験に乏しい筆者にとっては、又とない勉強の機会であったことを、今しみじみと感じさせられている次第である。又それにも増して、フィリピンのAlcala教授、フィジーのRaj教授に共通した、受入れ態勢作りの見事さには、参加者一同頭の下がる思いであり、又、国際交流を志向する際不可欠の基本条件であることを、身にしみて学ぶことができた。

現地調査の総括と、前回のフィリピン調査で得られた結果との比較研究は、1984年度における現地研究者との共同研究課題として、現在進行中である。

最後に、筆者等の一連の現地調査実現のために終始お力添えを賜った文部省当局、本学学長をはじめ学内の関連事務担当の方々、および南太平洋大学の方々に対し、参加者一同を代表して、深甚の謝意を表する。

引用文献

- Haysaka, S., Saisho, T., Kakinuma, Y., Shinomiya, A., Oki, K., Hamada, T., Tanabe, K., Kanie, Y., Hattori, M., Vande Vusse, F., Alcala, L., Cordero, P. A. Jr., Cabrera, J. J. and Garcia, R. G., 1982: Field Study on the Habitat of *Nautilus* in the Environs of Cebu and Negros Islands, the Philippines. *Mem. Kagoshima Univ. Res. Center S. Pac.*, 3(1), 67-115.
- Hayasaka, S. ed., 1983: Studies on *Nautilus pompilius* and Its Associated Fauna from Tañon Strait, the Philippines. *Occasional Papers No. 1, Kagoshima Univ. Res. Center S. Pac.*
- Hayasaka, S., Raj, U. and Shinomiya, A., 1984: Preliminary Field Study on the Habitat of *Nautilus pompilius* in the Environs of Viti Levu, Fiji. *Prompt Rep. 1st Scientific Surv. S. Pac.*, Kagoshima Univ. Res. Center S. Pac. 1-8.

■『南海研紀要』4巻2号

本号には以下の論文が掲載されている。

- Shigero IWAKIRI: *Mataqali of the Sea - A Study of the Customary Right on Reef and Lagoon in Fiji, the South Pacific.*
 新田栄治: タカロア島の遺跡とその諸問題
 (Eiji NITTA: *Archaeological Sites on Takaroa Atoll, Western Tuamotus and Their Problems.*)
- Kanetosi KUSIGEMATI: *A Revision of the Tribe Nonnini of Formosa and Japan (Hymenoptera: Ichneumonidae, Porizontinae).*
- Masaaki CHAEN, Fumiatsu IKEDA and Tomohiro KAWAGUCHI: *A Distribution of Surface-Water Masses in the Lungga Estuary, the Solomon Islands.*
- Toshiro ICHIKAWA: *Distribution of Two Groups of Bacteria, Oligotrophs and Eutrophs, in the Indian Ocean and the South China Sea.*
- Zainal ASHIRIN and Takehiko IMAI: *Model Experiments on Small Trawls Feasibility Study on the Double Rigged Versus Single Rigged Type.*

■Occasional Papers No.3

中野和敬編 **バブア・ニューギニアの生活と栄養**

本号は南方海域研究センターの主催によるシンポジウム(昭和58年2月23日)の記録で小石秀夫(大阪市立大学生活科学部食物学科・教授)、大塚柳太郎(東京大学医学部保健学科・助教授)、中野和敬(鹿児島大学南方海域研究センター・教授)の3氏の発表を全文掲載したものである。B5判, 71頁。

■The Prompt Report of the First Scientific Survey of the South Pacific (英文)

これは昭和56年度に南海研センターが、フィジーで実施した文部省特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」の研究結果の速報(昭和57年3月30日発行)の邦文版を英文版として発行したものである。民族、農学、水産、医学、地学の分野の合計31編の論文よりなり、南海研センターと南太平洋大学(The University of the South Pacific)の海洋資源研究所(IMR, Institute of Marine Resources)との共同で刊行された。なお、編集は寺田勇文氏(編集長, 南海研)、四宮明彦氏(水産)、衛藤威臣氏(農)、安藤哲夫氏(医)とUday Raj氏(IMR 所長)があたりれた。B5判, 159頁。

第三次「オセアニア海域における水陸総合学術調査」講演会について

井上 晃男 (南海研)

南海研主催の標記講演会が去る5月12日(土)、教養部101号教室で実施された。この講演会は、南海研が行なった主として海外での学術調査について、本学の学生、院生、教職員に広く知ってもらい、併せて南方諸地域への関心を高めようという意図で開始されたものであり、本年はその第三回目であった。当日の講演者は「第三次オセアニア海域における水陸総合学術調査—昭和58年、パプア・ニューギニア」に参加した4名の教官であった。また大阪大学における会議出席の帰途、南海研の招きで本学を訪問中であったパプア・ニューギニア大学(UPNG)副学長代理及び同医学部長もこの講演会に参加し、簡単なスピーチを行なった。それぞれの講演者の演題は次の通りである。

- あいさつ 石神兼文 (鹿児島大学長)
 - UPNGの概要
N.R.KUMAN (UPNG 副学長代理)
 - UPNGの教育と研究の現況
T.TAUFA (同医学部長)
 - パプア・ニューギニアへの旅
寺師慎一 (南海研教授)
 - オセアニアの作物 林 満 (農学部講師)
 - 熱帯水域の漁業 米盛 亨 (水産学部教授)
 - パプア・ニューギニアの水産業
片岡千賀之 (水産学部助教授)
- 司会 中野和敬 (南海研教授)

当日は約70人の出席者を得て、それぞれの演者の、現地でのあるいは往復の船上でのエピソードや体験を折りませた調査報告に熱心に聞入った。なおこの講演会は、できれば今後も引続き実施して行きたいと考えている。この紙面を借りて各位の御支持をお願いする次第である。

また講演会終了後、UPNG副学長代理及び医学部長を含む約25人が参加して懇親会が開かれ、和気あいあいの雰囲気の中に終了した。

第24回研究会 (パプア・ニューギニア調査報告会) 報告

中野 和敬 (南海研)

本研究センターが行なった特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」の第3年次(昭和58年度)パプア・ニューギニアに関する研究報告会は、昭和59年3月23日(金)午後1時より第24回南海研センター研究会として農学部124番教室で行なわれた。報告会は岩切センター長及び石神学長のあいさつで始まり、第1課題(Rural areaの土地利用と陸上生態系の保全)5報告、第2課題(熱帯水域の物質生産と資源の有効利用)3報告、第4課題(Rural areaの社会及び生活構造)3報告の計11報告が各々15分ずつ発表された。なお、第3課題(地域住民の遺伝と保健衛生)は現地での調査許可が得られず、その可能な範囲での資料による報告は弘前大学の仁平氏の1題のみとなった。また発表予定者で当日出席いただけなかった弘前大学の仁平氏、信州大学の渡辺氏、国立民族学博物館の和田、吉田両氏ならびに南海研の寺田氏と水産学部の益満氏、東川氏、西氏、有馬氏、内山氏の共同研究発表の4題は紙上発表のみとなった。

当日、学外よりの特定研究参加者のかなりの方が時間的な都合がつけられず、報告会に来られなかったのは残念だった。また、第5課題(西部熱帯太平洋の海洋構造とその変動に関する研究)の報告も予定されていたが、かごしま丸が急遽数日前に出航していたため、発表は取りやめとなった。以上のようなやや心残りの点もあったものの、来聴者が期待通りあり、予定した質疑時間いっぱいを使っての熱心な討論もかわされ、盛会だった。

発表会はほぼ予定通りの時刻に平田調査隊長の閉会のあいさつをもって成功裡に終わった。

研究報告会に続いて夕方6時よりグリーンホテル錦生館で懇親会が開かれた。特定研究も3ヶ年を成功裡に遂行し、昭和58年度末が一つの節目となるため、58年度の調査隊員は勿論、前2回の参加者等にも広く来会を呼びかけた結果、中尾前センター長、蟹江前学長、植田前かごしま丸船長等の参加もあり、60余名が来会して盛況だった。なお、同夜は会場に写真師を呼んでの一同の記念撮影もあり、なごやかな雰囲気の中に散会した。

センター研究会・活動報告

1984年3月から6月までの南海研センターの定例研究会および報告会は以下の通りであった。

■第24回(1984年3月23日)

特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術講査」(昭和58年度パプア・ニューギニア)に関する研究会報告会

(氏名の前の○印は代表報告者)

「パプア・ニューギニアにおける作物生産の概況」○林 満氏(農), 岸本 修氏(宇都宮大学農学部), 松澤康男氏(宇都宮大学農学部), 東照雄氏(農), 遠城道雄氏(農), 合原裕人氏(農)

「熱帯・亜熱帯地域の火山灰土壌の特徴について」○東 照雄氏(農), 林 満氏(農), 岸本修氏(宇都宮大学農学部), 松澤康男氏(宇都宮大学農学部), 合原裕人氏(農), 遠城道雄氏(農)

「ブーゲンビル島バングナ鉱床の火成岩」○根建心具氏(教養), 円城寺守氏(筑波大学地球科学系), 浦島幸世氏(教養)

「パプア・ニューギニアの焼畑」○中野和敬氏(南海研)

「パプア・ニューギニアにおける果樹, 樹木作物の生産概況」○岸本 修氏(宇都宮大学農学部), 林 満氏(農), 松澤康男氏(宇都宮大学農学部), 東 照男氏(農), 遠城道雄氏(農), 合原裕人(農)

「熱帯高山の植物季節について」 渡辺隆一氏(信州大学教育学部)(紙上発表)

「NAV-83の調査航程におけるバクテリア増殖能, 懸濁物, 燐酸態燐, 酸素消費等々の相互関連性と現地産シジミのリズム性」○平田八郎氏(水産), 加世堂照男氏(水産), 山口照男氏(水産), 益満 侃氏(水産), 山崎繁久氏(水産), 稲塚洋一朗氏(水産), 川口智治氏(水産), 黒田正和氏(水産)

「曳縄漁法と餌魚調査」○米盛 亨氏(水産), 鷲山直樹氏(水産)

「パプア・ニューギニアにおける海産藻類の植生について」○榎本幸人氏(神戸大学理学部),

鯉坂哲朗氏(京都大学農学部)

「パプア・ニューギニア工科大学学生の血圧レベル」 仁平 将氏(弘前大学医学部)(紙上発表)

「パプア・ニューギニアの市場活動」○田島康弘氏(教育), 石田尾博夫氏(九州学院大学教養部)

「パプア・ニューギニアにおける資本制漁業の展開」○片岡千賀之氏(水産)

「パプア・ニューギニアにおける都市部とハイランド地域住民の生活構造の比較」○石田尾博夫氏(九州学院大学教養部), 田島康弘(教育)

「パプア・ニューギニアにおける言語の生態」和田祐一氏(国立民族学博物館), 吉田集而氏(国立民族学博物館), 寺田勇文氏(南海研)(紙上発表)

「1983年11月のニューギニア北方海域の海洋観測について」 益満 侃氏(水産), 東川勢二氏(水産), 西 徹氏(水産), 有馬純宏氏(水産), 内山直樹氏(水産)(紙上発表)

■第25回(1984年4月20日)

「日本語とインドネシア語の対照研究」田尻英三氏(教育)

■第26回(1984年5月14日)

「昔の焼酎造りの伝播の中での薩摩の位置」蟹江松雄氏(前鹿大学長)

■第27回(1984年6月18日)

「南西諸島の母子関係」 寺脇 保氏(医)

■第3次「オセアニア海域における水陸総合学術調査」報告会(1984年5月12日)

「パプア・ニューギニアへの旅」

寺師慎一氏(南海研)

「オセアニアの作物」 林 満氏(農)

「熱帯水域の漁業」 米盛 亨氏(水産)

「パプア・ニューギニアの水産業」

片岡千賀之氏(水産)

「大阪大学南太平洋Colloquium 1984」に出席して

寺師 慎一（南海研）

1981年に創立50周年を迎えた大阪大学は、その記念事業の一環として「南太平洋学術調査交流計画」を立てた。そして1982年には南太平洋の国々の諸大学ならびに関係機関へ大阪大学よりその代表者理科系、文化系の各1名を派遣し、この交流計画に望まれる分野、可能性などを延べ70日にわたり調査し、その詳細は114頁にもわたる「事前調査報告書」（1983）として刊行している。

この様な計画のもとに1984年2月にはパプア・ニューギニア大学（UPNG）と実質的な交渉と交流活動を医学の分野で行い、その第一歩が今回のコロキアムの開催となった。「パプア・ニューギニアと日本——よりよい学術交流にむけて」と副題され大阪大学全体をあげての交流活動、パプア・ニューギニア（PNG）にかける意気込みは大変なものである。この会議にはUPNGより副学長代理Mr. Nicholas R. KUMANと医学部長Dr. Tukutau TAUFAの両氏が招聘され出席した。

会議は1984年5月9日（水）大阪大学基礎工学部国際ホールにおいて、阪大総長山村雄一組織委員長ならびにMr. Joseph K. NOMBRI 在日パプア・ニューギニア大使の挨拶によって始められた。午前の部では阪大文学部木村生信教授による「PNGの芸術」、Mr. KUMANは「PNGにおける零細農業」と題する発表があった。午後の部はDr. TAUFAによる「PNGにおける医学と医療」、阪大医学部藤田尚男教授による「大阪大学医学部の歴史と医学教育の概略」、さらに「太平洋諸分野における特定性と普遍性」と題された第三セッションは、特に今までPNGで行ったそれぞれの調査について8名の演者からの発表があり、これを通じてPNGの現状の理解と今後の交流への心構えを得んとすることにその目的があった。この演者の1人として寺師が「南海研と海外調査」について講演した。この様に

大阪での大任もなんとか無事に終えることが出来て安堵いたしているところである。

UPNGの両氏の会議における発表要旨はそれぞれ自分の専門分野での話であるという違いはあるにせよ、PNGにとっての現在の問題点は、もっと多くの知識や技術面での援助、今後の発展に必要な人材の養育と経済的發展ならびにこれらに要する資金の補助という発展途上国にみられる共通の悩みであった。

したがって学術調査、共同研究にしても国の発展の為に何らか役に立つものであることが望まれるのは当然であろう。

会議の後に開催されたレセプションでは南海研主催による文部省特定研究経費による海外学術調査、しかも水産学部所属の船を活用しての調査への質問が多かった。

UPNGの両氏はこのあと5月11日から14日まで南海研の招きで鹿児島大学に立寄り、石神学長をはじめ幾つかの学部の先生方と今後のUPNGとの学術交流ならびに学問上の意見の交換を行った。また医学部、歯学部およびその附属病院や施設、農学部、理学部、水産学部の案内や説明に多くの先生方のお世話になりました。最後にこの紙面を借りて各学部長をはじめ諸先生方、夕食の宴を御用意下さった石神兼文学長、わざわざ日曜日の1日をドライブと案内に当てて下さった早坂祥三先生に深く感謝の意を表したいと思います。

諸報

- 当研究センター・寺田勇文助手は昭和59年4月16日付けで助教授に昇任した。
- 当研究センター協議会委員・浦郷篤史氏は4月1日付けで歯学部長就任の為辞任し、小片丘彦氏が同日付けで発令された。
- 昭和59年度文部省内地研究員として寺田勇文助教授は昭和59年5月1日～昭和60年2月28日まで東京外国語大学アジア・アフリカ言語、文化研究所へ留学した。

南海研だより No.12 昭和59年 8月15日発行

鹿児島大学南方海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(54)7141 (内線)2058